

原子爆弾と放射線障害

平成7年5月29日(月)～6月23日(金)

昭和20年8月6日ウラン原子爆弾が広島に、9日プルトニウム原子爆弾が長崎に投下され、投下後数か月の間に広島で約11万、長崎で約7万の人々が死亡しました。その後も多くの人々が亡くなったり、後遺症(原爆症)に苦しんできました。

原爆の特徴は爆風の他に強烈な熱線と放射線を伴うことであり、そのエネルギー分布は爆風50%、熱線35%、放射線15%といわれています。特に放射線障害は原子爆弾特有の症状であり、長期に渡って人体に影響を与えたため、多くの人々の注目を浴びました。また、広島、長崎では多人数が一度に被爆したため、その調査データは線量限度(放射線防護上の上限被曝線量)を決める重要な資料となっています。

今回の展示では、原爆投下直後の放射線による被害及びその後の後遺症についての報告書を中心に集めてみました。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

[原爆製造計画における人体実験]

1. 木本 忠昭「マンハッタン計画における原爆技術体系と軍事技術的性格——放射能人体実験をめぐって」

社会文化研究(広島大学総合科学部)14〔1988〕269～295頁

<Z22-968>

[原爆の放射線による直接的被害の調査]

2. 荒勝又策「原子爆弾報告書① 広島市における原子核學的調査」

朝日新聞〔大阪〕 昭和20年9月14日

<YB-3>新聞閲覧室所管

3. 「広島および長崎の保健・医療部門に対する原子爆弾の効果」

合衆国戦略爆撃調査団医学調査部〔著〕 訳 森祐二

広島 広島平和文化センター 1987.2 126p.

<GB531-E46>

原文

“The Effects of Atomic Bombs on Health and Medical services in Hiroshima and Nagasaki” United States Strategic Bombing Survey, USGPO 1947.

<940.544-Us898e>

4. 「原爆被災学術資料に関する報告 AFIP からの返還資料について 第1次報告」

〔広島〕 広島大学原爆放射能医学研究所 1973 148p(図共)

<YP19-70>

5. “The effects of atomic bombs at Hiroshima and Nagasaki. Report of the British Mission to Japan” (Joint publication of the Home Office and the Air ministry) 1946.

The Controller’s Library collection of Her Majesty’s Stationery Office publications 1922-1972 [Non parliamentary publications, Washington]

Historical Documents Institute [197-] reels 35mm microfilm

1946.reel no.1454.

<YD-124>官庁・国際機関資料室所管

邦訳

「資料マンハッタン計画」山極晃, 立花誠逸編 岡田良之介訳 東京 大月書店
1993.9 650~688頁 英国調査団報告書『広島および長崎に投下された原子爆弾の
効果』

<NG153-E17>科学技術資料室所管

[被曝線量の推定]

6. Milton, R. C. 他 「原爆被爆生存者の1965年暫定線量(T65D)の推定」

広島・長崎 原爆傷害調査委員会 1968年1月 48p

<SC781-15>

7. Roesch, W. C. “US-Japan Joint Reassessment of Atomic Bomb Radiation Dosimetry in Hiroshima and Nagasaki”

広島 放射線影響研究所 1987年 2巻

<SC185-A4>

8. 「国際放射線防護委員会の1990年勧告」

東京 日本アイソトープ協会 1991年11月 231p.

<NG31-E25>科学技術資料室所管

